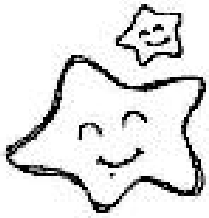
QSK
にぬふぁぶし
No.288
子（ね）の方向の星



たんかん狩り

読谷村家族会　當山 幸子

新型コロナウィルス感染症の影響で社会も生活様式も大きく変わった 2020 年。

新しい年こそ穏やかな 1 年でありますようにと願っていたのにー。県民生活またまた自粛、自粛・・・。

読谷村家族会、恒例のサクラ花見見物とたんかん狩りに、いつもは福祉バス 2 台で行くのにバスも使用禁止、定例会も行事もすべてキャンセルで何もない、これでいいの家族会？

糸数会長がたんかん農園に電話を入れたら、今年もたんかん豊作だという。すぐ計画して車 2 台で行きました。糸数会長、當山、松田、民生委員の役員 2 名と一緒に行きました。たんかんが「読谷の家族会待っていましたよ」って言っていました。

お土産のたんかん 5 kg、10 kg、40 kgそれぞれで買い、車の中はたんかんで一杯になり、香りに癒されながら、家族会の皆さんに「にぬふぁぶし」と一緒に配りました。たんかんをもぎ取って食べると前へ進む力が湧いてきます。不思議な力があります。困難に直面したとき、心が折れそうになったとき、コロナで不安で押しつぶされそうなとき、だからたくさん食べました。今回はサクラの開花は見られなかったけど、仕事が少なくなった息子と二人で八重岳のサクラを見に行こうと思います。

きっと満開のサクラはコロナに負けない生きる勇気と生き抜く力をくれそうな気がして、、、

「学び」とは何か？と考えた

沖縄市地域活動支援センター　ミッドリンク
安里　盛和

去った、2020 年 12 月 20 日に福岡県にて公認心理師試験を受験してきました。今年度は新型コロナ（COVID-19）の影響で、試験日が 6 月から 12 月に延長され、試験対策への期間が増えた様に感じていました。しかし日々の業務や社会福祉士基礎研修等に忙殺され、試験対策が不十分でした。第 3 波での緊急事態宣言前でしたが、さすがに試験をオンラインで行う事はできない為、マスク着用や手洗い消毒・三密を避ける等のコロナ対策を徹底し、受験する事にしました。ちなみに今年度の社会福祉士基礎研修は基本オンライン（Zoom）となっています。

公認心理師試験受験の動機は心理的支援の強化であり、心理検査を用いてのアセスメント・カウンセリングの面接技法等を身に付け、クライエントの QOL や動機付け等の向上をはかる事でした。しかし少量の試験対策のみで上述の技法を身に付ける事は困難であり、本末転倒になってしまったと感じています。

そこで「学び」とは何か考えてみました。私が試験対策で行った事は単なる記憶であり、「学び」ではないと感じています。記憶とは記銘（符号化）・保持（貯蔵）・想起（検索）と認知心理学ではいわれています。学びとは記憶の想起（検索）を繋ぎ合わせ流動的にアウトプットできる状態だと考えました。今年度の公認心理師試験の合否は、まだ発表されていませんが、有限なる時間を有効活用できる様、今回の失敗体験も大切にし、今後は生きた「学び」が得られる様に学習を行い、実践で活かしていきたいと痛感しました。

ミッドリンクの愉快な仲間達です笑

安里　平田所長　名嘉真さん

1point　公認心理師とは？

「保健医療，福祉，教育その他の分野において，①専門的知識及び技術をもって，クライエントの心理状態を観察し，その結果を分析する。②心理に関する相談に応じ，助言，指導その他の援助を行う。③関係者に対し，その相談に応じ，助言，指導その他の援助を行う。④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行う。」と公認心理師法に定められています。

フツーに生きづらいことと、ちょっとかたよって生きづらいことと

障がいとはなんだろうということを、また強く考えさせられた。

『ひとの気持ちが聴こえたら』は、著者のジョン・ロビソンが自ら受けた自閉症スペクトラム治療の実体験をつづった記録だ。

経頭蓋磁気刺激（TMS）という医療技術の臨床研究に参加したロビソンは、実験を受けたそのときから自分自身が目ざましく変化していくことを感じる。

たとえば音楽を聴いて感情が揺さぶられるようになる。自分自身のしゃべる声を聞きながら、以前よりもそこにイントネーションが増していることに気がつく。会話をしながら、相手が言葉の裏で考えていることを想像できるようになる。

自閉症スペクトラムの診断基準（DSM−5）には、アイコンタクトや表情、身振りといった非言語性コミュニケーションにおける障がいや、他者との感情共有の困難さなどが挙げられている。TMSを体験したロビソンは、これまで彼のなかで抜け落ちていたそういった言外の意思疎通というものを理解するようになっていく。

過去の自身の振る舞いを思い出して、彼は恥ずかしさを覚える。

そのうちに仕事のうえでは、前よりもずっと感じのいい人間になったとも自覚する。

一方で、夫婦関係はぎくしゃくし始める。妻はうつ病を患っているが、以前だったらなにも感じなかった彼女の気分の落ち込みが、ロビソンのなかにも入り込むようになる。以前のようには受け流すことができない。明るく励まして、自分は自分で仕事に打ち込むということができない。仲の良かった二人は、結果的に離婚に至る。

障がいと名指されるものが、人と人とのあいだ、人と社会とのあいだに横たわるものだとしたら、その治療というものはなんだろうかと思う。

治療を受ける以前から仕事でも既に成功し、夫婦関係も良好だった著者がいる。

治療を受けたあと、過去の思い出が書き換わり、楽しかったはずの記憶が腹の立つものに変わったり、長く続いていた友情が破綻したりといったことが起こってくる。また別種の危惧として、人が社会のなかで「標準化」していくことの弊害として、大きな才能や個性が失われる可能性があることも彼は認める。

それでもロビソンはTMSの技術に未来を見ているし、新しいパートナーと出会って再婚もし、いまはいまで幸福に暮らしている。だから読後感はポジティブだし、書かれていた人たちに実際会ってみたいとも思わせられる。

発達障がいというものについて理解を深めるうえでももちろん有意義な一冊だけれど、それだけでなくて、多少おおげさにいうと、人や社会の可能性について書かれた本のように感じた。（増山）

沖国大 市民講座の報告

2021 年１月９日（土）、沖縄国際大学・南島文化研究所の主催する市民講座がありました。「戦後 75 年：沖縄の障害者は何を主張してきたか」をテーマとしたオンライン講座で、沖福連からも会長の山田が登壇者として参加しています。

沖縄県聴覚障害者協会から前会長の比嘉豪さん、自立生活センターイルカからはスタッフの早坂佳之さんがそれぞれ登壇、団体としてのこれまでの活動を振り返りました。

ウェブ会議の Zoom（ズーム）と、生放送でビデオ配信ができる Youtube（ユーチューブ）を利用しての今回の講座は、コロナの時世を反映してのものでしたが、音声も聞き取りやすく十分に快適な視聴ができたと感じています。

後半の質疑応答のなかでは、イルカ代表の長位さんより“後継者育成問題”についての投げかけがありました。どのような団体も活動も、発足～黎明期には発起人とも言うべきリーダーを中心に、共鳴する人たちも含めた大きなエネルギーがあるものです。しかし、そうした熱量や、あるいは核となる思想信条を、団体として次の世代に受け継ぎながら発展させていくことは、社会に対する啓発活動と同時に、もしかするとそれ以上の努力や工夫が必要となるのかも知れません。

たんに知識を伝えていくだけではなくて、時代時代に応じた変化も必要と感じます。変化のためには、背景も含めて正しく歴史を知ることが定石となります。

南島文化研究という少し耳慣れない切り口から障害当事者団体の活動を振り返った今回のシンポジウムは、また今後の展望を照らすうえでも有益な時間となりました。（増山）

◎編　集　後　記◎

皆さん、こんにちは。寒い日が続いていますが、体調にはくれぐれもお気をつけ下さい。

さて、私は今、社会福祉士の国家資格取得に向け通信教育でのレポート作成の日々が続いております。今年は、社会福祉士の国家資格に向けて猛勉強の１年になりそうです☆（う）

編　集：公益社団法人沖縄県精神保健福祉会連合会
会　長　　山田　圭吾
〒901-1104
沖縄県島尻郡南風原町字宮平 206－1
てるしのワークセンター内
電話 098-889-4011　FAX098-888-5655
E-mail　terushino@castle.ocn.ne.jp
発　行：九州障害者定期刊行物協会
〒812-0054　福岡県福岡市東区馬出 2-2-18
電話 092-753-9722　FAX092-753-9723
定　価：１０円（会費に含まれる）